

## 論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 乙 第	号
------	-------	---

氏 名 清 水 右 郷

論 文 題 目

科学の価値自由性の批判的検討と代替的理念の探求

論文審査担当者

主 査 名 古 屋 大 学 教 授 戸 田 山 和 久

委 員 名 古 屋 大 学 教 授 安 田 孝 美

委 員 名 古 屋 大 学 准 教 授 秋 庭 史 典

委 員 名 古 屋 大 学 准 教 授 久 木 田 水 生

清水右郷氏の論文「科学の価値自由性の批判的検討と代替的理念の探求」は、社会の中で科学者の専門知がどのような役割を果たすべきかを明確化するため、「科学と価値」をめぐる論争を横断的に検討した科学哲学的研究の成果である。氏は、科学内部の価値判断（科学的推論に内在する価値判断）について、2つのリサーチクエスチョンを設定している。すなわち、科学者は現に科学的推論から非認識的価値（説明力・厳密性など知識の信頼性に関わる価値ではなく、経済成長、環境保護などのそれ以外の価値）を取り除こうとしているのか、という記述的問い、および、科学的推論からそうした非認識的価値を取り除くことが本当に望ましいのかという規範的問いである。これらの問いに答えることによって科学と価値をめぐる新たな理念を確立しようとしている。

論文は5部・10章構成である。第I部（第1章）では、上述した問題背景・論文の目標・その目標を果たすための方法論が示される。本体の第II部では、まず文献研究の方法が採用される。第2章において、科学哲学で「帰納のリスク」と呼ばれてきた議論（仮説検定等では偽陽性・偽陰性がもたらす社会的リスクについての考慮が不可欠であり科学的推論には価値判断が含まれる）をめぐる論争史を詳細にサーヴェイし、それをふまえて第3章において、帰納のリスク概念を拡張し、科学と価値について分析する包括的枠組みを取り出している。

第III部では、リスク評価分野のケーススタディに基づき、データ収集後の適切な価値判断のあり方について考察している。第4章で量的リスク評価の発展史を記述したのち、第5章で保守的リスク評価の指針とされる予防原則について、それが科学的推論に含まれるべき望ましい価値判断と言えるのかを検討している。とくに、予防的措置をとること自体が持つリスクとのトレードオフの問題を検討し、環境対策等では対策の遅れで被害が拡大した過去を踏まえ予防的措置に傾くことには一定の合理性があるとする「歴史的偏りの矯正」論を採用しつつ、その矯正の必要性には分野依存性があることを指摘している。

第IV部では、臨床医学研究のケーススタディに基づき、研究実施前の適切な価値判断のあり方について検討している。準備として第6章で日本の臨床研究倫理審査制度を概観したのち、第7章では具体的事例として利益相反のあるランダム化比較試験における不適切な価値判断の混入が問題となった「ディオバン事件」を分析し、提案された再発防止策では必ずしも科学内部の価値判断の徹底的排除を目指していないことを明らかにした。これに基づき第8章では、研究デザイン選択時に、認識的価値と倫理的社会的価値とをどう衡量すべきかを論じている。第9章では利益相反リスクの管理の適切なあり方を提案している。

第V部（第10章）は本論文の結論であり、検討成果をまとめ、「価値自由な科学」に代わる科学の理念として「倫理を織り込んだ科学」を提示している。

以上、清水氏は、「価値自由性」という古典的理念を批判的に検討し、科学内部に価値判断を組み込んだ新しい科学像を提示するという理念的目標を果たしつつ、その研究は具体的かつ詳細なケーススタディに基づく。その過程では、さまざまな分野において科学的判断と価値判断との望ましい衡量のための具体的指針の提案もなされ、社会的意義も大きい。よって本論文提出者、清水右郷氏は博士（情報学）の学位を受けるにふさわしいと判断した。